

特集

21世紀のグローブ像

一片の制作者たち



Media  
Grove

21世紀におけるインディーズ雑誌



ハンソウデ シャツ

Design 11type

Anvil製

2000~3800yen

インテースブランド

KOOK'S HIGH HAT

こちらにオーダーシートをご用意しております。  
[http://kooks-highhat.com/jpn\\_index.html](http://kooks-highhat.com/jpn_index.html)



自分でデザインとカラーをチョイス  
Design 24type

Color of ink 7type



United Sports 製

Color of shirt 5type



1/13~12/14 All 4000yen!!  
(通常4500yen)

ハンソウデ シャツ

# PDFの正しい読み方

目的の内容への移動には・・・  
**「しおりやリンクを使おう！」**

まず、あなたが見たい内容を探さなければなりません。次に、見たいページが見つかったらどつするのかが、これらを簡単にするテクニックを紹介します。

「しおり」とは、文書内の対応する部分に移動するため  
の見出しです。「パレットの表



パレットの表示 / 非表示

示 / 非表示」ボタンで「しおり」を表示してください。目的の見出しをクリックすると、対応するページへ移動します。

また、目次や文章中のキーワードはリンクになっている場合があります。リンクされている単語の場合は、マウスカーソルが絵のようになります。その単語をクリックすると関連する文章へ移動します。ときには、関連するホームページへのリンクにもなっていることもあります。この場合は、「ファイル 環境設定 ≡webリンク…」においてWebブラウザを設定している必要があります。

では、実際に試して見ま  
iboard with  
リンクの時  
しょう。次の文字をクリックしてみてください。URLの方は、インターネットへの接続と設定が必要です。

表紙へリンク

<http://r7.1r.net/>

ページを効率的に読むには・・・

**「アर्टイクルを使おう！」**

読みたいページが見つかりましたか？見つかったら、ページを読みやすくするテクニックを使って読んでみましょう。

「アर्टイクル」とは、文章を流れるように読むためのサポーターです。アर्टイクルが設定してあるところでは、マウスカーソルが絵のようになります。そこでクリックすると、文章の最初の部分が読みやすい表示倍率で表示されます。続きの部分を表示するには、マウスをクリックしてください。「Stop」をクリックで戻ることもできます。アर्टイクル表示を止めたい場合は、コマンドバーなどで表示倍率を変えてください。



アर्टイクル

尚、アर्टイクル表示中の表示倍率は、「ファイル 環境設定 一般…」の「描画領域のみを表示する場合の最大倍率」で変更できます。

実際に、このページもアर्टイクルを使用して作られています。利用して読んでみてください。設定を読みやすいように変更することも大切です。

それでも読みにくい方へ・・・  
**紙ご印刷してみてもいい？**

当誌では、当PDF所有者による個人的な印刷を許可しております。

パソコンの画面ではどうしても読みにくい、またはこの記事はじっくり読みたいなどの場合には、印刷する方が良いでしょう。

印刷をする場合は、コマンドバーの「印刷」を押してください。



印刷

お手持ちのプリンターで印刷できます。用紙サイズにより自動的に拡大・縮小されて印刷されますが、文字の大きさ・読みやすさの点からA4サイズをお勧めいたします。

尚、当誌を印刷したものを再配布・無断転載することは禁止しております。印刷は個人的な範囲でのみご利用下さい。

友人や知人にも見せたい・・・  
**再配布について**

再配布は、このPDFファイルで改変を行わないオリジナルの状態に限り自由に行うことができます。オリジナルがどうかは、メニューより「ファイル 文書情報 一般…」を開き、更新日時をご確認ください。PDFに変更がない場合、更新日時は目次(この後のページ)の号数表記のそばにある更新日時とほぼ一致するはずですが、一緒ではありません。

尚、当誌を印刷したものを再配布・転載することは一切許可いたしておりませんが、したがって、当誌に似せた印刷物による著作権の侵害などを発見した場合は、直ちに法的な対処をとらせていただく場合があります。印刷物の掲載・転載の許可に関しては、お気軽にご相談下さい。

Mediagroove 編集部 [mg@r7.1r.net]

## コマンドバーの説明

### 一般的な移動の方法



最初へ 前へ 次へ 最後へ

### 表示倍率の変更方法



実物大 全体表示 幅最大

スペシャル

# 21世紀のグループ像 一片の制作者たち

インデーズバンド - モーニング息子・通い妻・fey

## *Independent Works*

「Over The Horizon 第1話(4)」R7 project

21世紀におけるインディーズ雑誌

# Media Groove

- PDFの正しい読み方
- 編集後記

• 読者アンケート

目次を読むときの注意!

この目次は、「しおり」と対応したリンクになっています。読みたい目次に対応する「しおり」を選択するか、目次をマウスでクリックすると、そのページへ移動します。

### AD. INDEX

KOOK'S HIGH HAT

実現するか!? 企画段階項目

- , Indies Band 紹介コーナー
- , HPサイト連動コラム
- , MediaGroove Radio
- , 同人誌紹介
- , Novel to Novel

表紙

「fey・モーニング息子・通い妻」

(「21世紀のグループ像」より)

Photo By: 本田

1・2月号

作成 1999/12/24 20:15

発行 1999/12/25

発行元 R7 project (mg@r7.1r.net)

(C) R7 project, 1999. 禁・無断転載

# 21世紀のグループ像 一片の制作者たち

取材：相沢 裕貴  
撮影：本田・青羊

最近「ミレニアム」という言葉がよく聞かれる。2000年という新たな時代の到来を祝おうというものらしい。そんな時代の変化の中で、次の時代を創造していくだろう人々が、インターネットなどを通して活動している風景をよく見かける。そんな彼らのことを「インディーズ」という。

インディーズとは、企業などに属さない独立したという意味の「independent」が語源である。その意味の通り、彼らはインディーズという名の元互いに協調しながらも、一人ひとり自分の未来に向かって歩んでいっている。ここでは、そんな彼らを、インディーズという同じ視点から見ていきたい。その中で、これからメディアがどのような方向に進んでいくのかを考えたい。そして、インディーズの面白さや苦労、同じ「夢」を持っている人々にインディーズ活動の可能性を伝えていきたいと思う。

今回は、最初ということで、音楽系のインディーズグループ3組にインタビューを行った。その模様をお伝えする。

ここでは、より多くのインディーズの方を紹介していきたいと思っている。今回の音楽系だけではなく、小説やコミックなどの制作者でもインディーズであれば、是非とも紹介したい。興味のある方は、後の方を見て欲しい。



# モーニング息子

まず、グループの紹介からお願いします。

正顕：じゃあ、モーニング息子の生い立ちですね。正顕と福容がある日一緒にいます。福さんがなんかやるうよって言うって、おまえギター弾けるじゃんといつことになって。で、そこにたまたま尚一君がいて、「尚一は何できるの？」っていつて、「俺は楽器も何もできないけど、ギヤグなら言えるよっていつたから、じゃあ、ギヤグやるうよっていつて、はじめたのがモーニング息子なんですけど。」

福容：それにしても、「モーニング息子」ってこのグループは増えたよね。

正顕：ほんとに。

福容：多い。だから、アルバム1枚出したら解散します。

正顕：新しい名前にして、また再結成。なので、わりと今だけだよって感じ。で、旬なところ。

いつ頃結成したんですか？

福容：結成は、彼(正顕)がひとつ後輩なんですけど、彼が入学して1、2ヶ月くらい。

正顕：(結成してから)一年半くらいですかね。

福容：そうです。ただ結構、活動は最初の頃はまばらで。ちゃんと本当にギターとか使ってたのも、このCD作った時。

正顕：あれほんとに、初めてなんですよ。だから、初めてなのにあのクオリティはびっくりしたよね。自分たちに。(笑)

福容：他人じゃなくて、自分が。(笑) 正顕：いやほんとに。それまで、ただ集まってテープ回して面白い事ってたりってただけだったんです。

福容：だから、CDに入ってる、父子日記(処女作)とかは、楽器はなくてメロディーもなくて。

正顕：打ち込みをバックにギヤグを言ったただそれだけの曲だったんです。まあ、どっちかっていうと、俺が実際に曲ちゃんと作りたくなっただけの曲がある。それをモーニング息子でやらしてもらってるとっていう、形なんですけど。最近はまだ一君がギヤグばかりじゃなくて曲も作ったりとかはじめたんで、結構面白くなってきてるんですけど。

福容：彼がアイデアをいっぱい出してくる人なんです。でも、出しっぱなしなんで。

正顕：そう。俺と福ちゃんて何とか形にしようかっていつ。

福容：僕は、後片付け。

正顕：整理整頓して。俺と尚一は結

構言いつばなしなんだよね。「こんなアイデアがあるよ」ってそれだけ、ボサノバやるうよっていつたらボサノバやるうよそれだけしか言わないんだよね。(笑)「じゃあボサノバのコード進行はどうするの？」って、それは考えてないって。行き当たりばったりですね。

福容：でも、一日一曲できたりするんですよ。

おー、それはすごいですね。 正顕：今日曲作るうよって、何のアイデアも無くなり集まって曲作るうよって。それで、一日結構。

福容：出来ちゃったりするんです。 正顕：そこハモニーでっていつて、パソコンで無理やりハモニー作ったりとかして。あれすこかったね。

福容：あれは、すこかった。 正顕：ちょっと期待してください。

なんか、他にもこの曲はこう作ってたみたいな、これは面白かったという話がありますか？

正顕：「男子ロック」おもしろかったよね。

福容：「男子ロック」ですね。

正顕：「男子ロック」は作ったとき初めて音楽的な衝突が、「こんな曲じゃだめだ」って俺がブチ切れて。

福容：そう。最初はまだ冗談で、キーボードのプリセットのドラムパターンとかあるじゃないですか、それを僕がテコテコいじってやってたら。

正顕：しかも、「生ドラとろう」とかわけわからないこと言ってたんだよね。 福容：「こんなんじゃ駄目だよ」とか。

正顕：「まじめに創らうよー」とかいつて。 福容：で、「じゃあ打ち込むよー」って。

正顕：打ち込みがもできてるのにコード進行変えたりして、無理やり作ったんだよね。あれ結構、偶然の産物なんだよね。

福容：「じゃあ、明日までに打ち込んでくから、明日ギター録りに来い」って。

正顕：コード進行、全部考え直した。

というか、構成しなおして、それで、後ギターソロとか、ボーカル(ゲスト多数)は一発どりなんです。

今回CDに曲が入ってますよね。CDにするのは今回が初めてですか？

正顕：初めて。全く初めて。

福容：人に聴かせてたのも、友達くらい。世に出るのは初めて。最初のノリでは、多分、自分たちで笑って終わりそうな感じだったんだけど。ある時、このままじゃだめだ。

正顕：せっかくだからだそうよって。ほんとそんな感じで。そして、一番の好評をいただいて(笑)。びっくりします。

福容：今はかなり、精力的に活動しています。

最後に今後の活動方針を。

正顕：アルバムが出ます。

福容：ファーストにしてラスト。ラストにしてラスト(笑)。超大作が。20曲くらい入ってるんじゃないかって。

正顕：もうね、いっぱいいっぱいに入れる予定だから。ちょっとね、損はさせないですよ(笑)。や、ほんとにね。もったいないよね、出すのがね(笑)。

福容：自分の娘みたいなものだから。 正顕：「この曲がわかるのか？」って感じ。ほんとわかってもらえないかもしれないけど。まあでも、ギヤグは控えるに、まじめに。今年中は無理だけ思うけど、来年にはなんとかアルバムを出したい。

じゃあ、アルバムにむけて頑張ってください。ありがと(笑)ございました。ありがと(笑)ございます。





# 通妻

まずは、グループの紹介からお願いします。  
通い妻1号です。

2号です。  
3号です。  
後藤です(笑)。

グループの結成のきっかけは？  
1号：わんかないです。自然と集まりました。

メンバーは、大学から結成した？  
1号：いや、まあ、そんな感じですか？  
これって何かに載るんですか？

一応、これから文字にして記事に。  
1号：まじっすか？ ジャナルモード  
(何やら手で仲間に合図する)。何の雑誌ですか？

インディーズ雑誌で、僕が発行した『Media Groove』というものです。  
1号：まじですか？ 雑誌をはじめたきっかけは？

とりあえず、R7projectで小説を発行したかったというのが一番です。他のインディーズで頑張ってる人たちの作品も集めて発行すれば、多くの人たちが見てくれるんじゃないかなと思って。  
1号：R7projectを作ったきっかけは？

高校のときの友人。気の合った仲間が集まったという感じです。みんな思考が似ててというか、小説を書いていたりとか。  
1号：どっち系の小説ですか？

ファンタジーとかですね。  
1号：え、なるほど。では、これから頑張ってください。今日はどうもありがとうございました。

で、音楽の傾向とかは？  
1号：あつ。

例えば、誰が曲や詩を作っていたりしてるんですか？

1号：曲は勝手に送られてくるんですよ。上から。それを僕らは音にするだけなんで。メンバーは、いろいろな業界に散らばっていて、古くは\*\*\*\*\*とか(笑)。

(沈黙)  
1号：もっとしゃべれ。僕らは、そう言つのを音にして形にしてくださいなんです。はい。家では、もっぱらフランクザッパしか聴きません。

こんな活動をして、良かったことがありますか？  
1号：女の子にもてるってことですかね。R7projectはまじっすか？

いえ、小説しか出してないんで、ファンの人とか見ないんで。  
1号：どんなタイトルがあるんですか？

Over The Horizonとか。  
1号：へー、かっこいいですね。あつ、Over The Horizonは今度曲にしようって行きます。

あ、ありがとっついでに。後藤：地平線を超えてですか？  
1号：殺すぞてメー。半端なこといつてると。今日は相沢さんをお迎えしてお送りしました。ありがとっついでにしました。



© 通い妻

まず、グループの結成のきっかけから。

hisuki: ・うちのバンドはメンバーが今2人で、しかもつくばと広島でちよつと離れてるんです。高校時代に結成自体はさかのぼるんですけど。(高校では)バンドやってもオリジナルやってる人はいなくて。僕はそれがすごいやで。バンドはやりたかったんですけど、曲書かない?って言うんですけど、曲書かなくて、それだつたらせ口からでもいいから、気の合った仲間とだつたらやれるかなと思って。悪いことにそれが実行に移つたのが、みんな(当初は4人)照れ屋で、高3の8月にようやく結成したんですよ。やつぱ高3の8月でして、あれよあれよというまに卒業してしまい。で、ベースの人はベースを一応やってたんですけど、ギターもドラムも楽器もない経験もないで、あるのは僕のパソコンぐらい。高校時代は何も活動してないです。大学入って、それぞれの大学で音楽しようかなって思つたんですけど、このメンバーでやりたいっていうのが、特に今残つたメンバーにあつて。

hisuki: ・最初のうちは、結局技術がないのに曲は書けないだらうことになつて。最初の1年は、ギターの人はずっと大学のサークルで練習して。ところが、ベースとドラムの人はそうでもなくつて。ギターのやつは、気でも触れたかのように練習したんですけど。まだ2年半ぐらいですね、大学入る直前にギター買って、すごいうまくなつたと思つたんですけど。でもまあ、リズム隊の2人は結局やめちゃつたというか。そんなに別に:音楽好きだけど、音楽やらなくてもいいかなつていう。僕は、他に表現手段がない、もしくは一番の表現手段だつたから。脱退解散の危機を乗り越え今に至るわけです。

やつぱり、距離つていうのは、結構厳しいですかね?

hisuki: ・そうですね。ライブとかできないうで。でも、最近はつていうか、環境が良くなつてからは、お互いメールでとりあえずMIDIファイルの交換して、それで曲書いてるんで。逆にだから、いっつも顔合わしてるサークルとかのバンドにはできないところもあるかもしれないですね。もちろん彼らができることが我々にはできなかったりするんですけど。ライブとか普通に、で、すごい離れてて、なかなか活動できないんで、その悔しさが原動力になつて、今回のCDを企画したんですけど。

やつぱり将来、こういう形のバンドになりたいというの?

hisuki: ・そうですね。まず、近いところに住みたいですね(笑)。卒業したら。卒業できたら。卒業出来次第(笑)。いまできてるのは、結構、やつぱり曲つてできるのに時間かかるんで、結構、昔の自分らだつたりして。もっと、今の(自分)もだしたいんですけど。

ホームページで見たのですが、以前雑誌に応募してたりしてましたよね。CDも前に出してたりしてますけど? hisuki: ・休みはいつも集まつてるんですけど、(ライブには)メンバーが足りないんですよ。ベース探して、ドラム探して、息があつて、つていう段階にまでたどり着けないんで。で、結局、曲作つて録る、録つて配るつていうのがメインで。その分、雑誌とかに投稿しよう。

今回、CDをオムニバスで作ろうというの、何がきっかけ?

hisuki: ・去年の夏ぐらいに発想だけあつたんです。まずはやつぱりもっと活動を広げたかつたんですよ。(自分たちだけだと)やつぱり内輪になつてしまつじやないですか。それもちょっと寂しいなと思つて。実力つけるのが一番なんですけど。うちのギターの大学の友人も、うちと同じみたいに高校の友達と組んでて(RAT)。そういう同じ境遇の人も、もっと、もっと、

もっと:・もつたいない、せつかくのそういう才能をださないと損だなつて。別にえらそつなこと言える立場じゃないですけど、ちよつとなんかやるうよつて言つて。やつぱり、最初はみんな慎重なんで、まだ早いんじゃないかなつていう話になつて、延びてきたんですけど。だいたい、録音するのにこぎつけるのも古いものになつてるから、結局出すのが恥ずかしかつたりするんですよ。けど、出さないことには始まらないので。他にも、オムニバスはユニット形式で、だいたい大学が違うバンドが3組ですか。目指してるものは違つんですけど、一歩踏み出したかなつて。

やつぱり、宿命かもしれないですけど、インディーズで活動してるって、どうして周りの評価があまり聞けないつていうの?

hisuki: ・そうですね。まだCDのアンケートが帰つてきてないです(笑)。もっと、でもフィードバックは欲しい

ですけど、こつちがもっと大きいものを出していけば、もっと大きいものが帰ってくるんじゃないかと思ひます。

最後に、今後はどうつて活動を行つてつて、将来どうつてことをやつていきたいつていうのを。

hisuki: ・ほんと夏にオムニバスと平行してやつてた、ワンマンつていうか僕らだけのセカンドアルバムをまず完成させて、ライブとかにも挑戦していきたいんですけど。セカンドがまだできてないのに、サードの曲がちらほらできてたりとか。結構、形にしたがりなんで、どんどん作つていきたいですね。音楽性もだいたい広がつてきたつていうか、ようやく広がりをだせるようになったというか。まあ、ひとつのジャンルにはできればこだわりたくないつていうか。オリジナルリミックスは、僕は混ざり具合つていうかそこに求めてるんで。ただ、同時にはらばらでもアルバムつぽいのがいいですね。シングルズつぽいのは嫌いなんですよ。

hisuki: ・で、まあ、できればこれで食いたいんですけど。食えなくてもやり続けます。

どうも今日はありがとうございました。どうも、ありがとつて言ひます。



fey

今回は、3組にインタビュアーをさせて  
いただいた。3組はこれからも、非常  
に面白い活動を展開していきそうだ。  
特に彼らは、まさに音を楽しんでいる  
音楽だという感じがした。インディ  
ーズという立場でありながら、このよう  
に活動を行っているのだ。逆に、インディ  
ーズという立場で音楽の可能性に挑戦  
しているのかもしれない。私は、最後  
のfeyさんの「僕らは、他に表現手段が  
ない、もしくは一番の表現手段だった  
から」という言葉が一番印象的であっ  
た。

インディーズは非常に流されやす  
い存在だと思う。多くの人に読んで欲  
しい、聴いて欲しいと願えば、結局は  
時代の流れに流されていってしまう  
のではないかと思う。しかし、そのな  
かで自分のアイデンティティを主張  
していつている今回の3組に、私は同  
じインディーズ活動をしながら何をやっ  
ていけばいいのかという目標をもちら  
うたような気がした。



© モーニング息子・通い妻・fey

この「一片の制作者」では、多くの方を紹介していきたく思っている。作品は、この後の「コーナー」「IndependentWorks」で紹介しているこの「R7」が配布される多くの読者に読まれている頃には、「SoundActive」という音楽系インディーズの作品掲載・検索・リンク・販売ページが公開されていることと思う。それらの手段を使ってインディーズを広めていきたいと考えている。実際、これはインディーズの活動を広める一つの手段にしかないが、大きな手段になるように努力していきたく考えているので、興味のある方は以下のページにアクセスして欲しい。

また、今回のインタビュアーは誌面の都合上かなり省略しているがこの模様は上記ページにあるインターネットラジオ「RadioActive」にも公開している。是非、こちらも聴いて欲しい。  
(RadioActive  
<http://www.R7project.net/Sound/>)

また、インタビュアーの中で、おもしろい出てきたオムニバスのCDで「Melting Pot99」と「インク・ベース・ムーメン」である。今回「インク・ベース」について、「モーニング息子」通い妻「fey」に加え、「LOVESICK」「RAT」などが参加している。「インク・ベース」のインタビュアーを、ぜひ「聴いてみて欲しい」。購入希望者は「AlephRecords」#R7。  
(AlephRecords  
<http://www.geocities.co.jp/MusicStar/8723/aleph.html>)

「インク・ベース」の「RadioActive」の一部の曲を紹介している「R7」是非購入の参考にして欲しい。  
最後に今回「インタビュアー」に協力いただいた「モーニング息子」「通い妻」「fey」に感謝を述べるとともに、「これから活動」を応援していきたいと願っています。

# Independent Works

今日の掲載作品

感想文[reader@r7.1r.net]<

小説

「Over The Horizon」

R7 project

<http://r7.1r.net/R7/>

ブログを目標として活動している wing/  
方やインディーズとして活動されている方々の作品を紹介しているのが、JG「Independent Works」だよ。  
「より多くの方向」小説・コミック・音楽・イラスト・映像など様々なジャンルの作品を知って欲しい。「制作している方々についても知って欲しい。」edit@r7.1r.net  
そんな思いで、このコーナーを制作しています。  
尚、郵送やFAXでも受付て作品の感想や制作者への応援などのメッセージを募集しております。メッセージはE-mailで直接制作者アドレスを掲載している場合のみ)か

掲載希望・ご質問などは  
E-mail:

edit@r7.1r.net

尚、郵送やFAXでも受付ております。メールにてお問い合わせください。

掲載作品に関するご注意

ここに掲載されている作品の著作権などの全ての権利は、制作者にあります。いかなる場合でも、一部または全部を無断で転載または複製することを禁止いたします。権利を侵害する行為を発見した場合は、法的手段に訴える場合があります。

転載に関するご相談などは、メディアアグルーヴ編集室 [edit@r7.1r.net]までお問い合わせ下さい。

関連ページ「wing」

<http://r7.1r.net/>

## 第一話 旅立ち

R7project

4

クラークンとの戦闘は熾烈を極めていた。

水夫たちは皆武器をとり、船客たちの中にも幾人か戦う者もいたが、狂ったかのように攻撃を続けるクラークンに対して戦況は明らかに劣勢だった。

水夫の中には、すでに数人の犠牲がでていた。

そんな中アロンは呆然と立ち尽くしていた。

自分の無力さ故に、一人の水夫がクラークンに飲み込まれてしまったのである。

「アロンー……」

聞き覚えのある声があった。次の瞬間、アロンは背後からラベルの突進を受けて、その場に倒れた。

それと同時に、巨大なイカの足がアロンの頭の上をかすめていった。

「アロンー……」

そこにまたクラークンの足が攻撃をしてきた。

二人は左右に飛び、それを避けた。

「アロンー早く逃げろー」

ラベルはいらついた口調で言った。

「いやだ。俺も戦つー」

「アロンー……」

背後から声があった。

ソニアが船室へ降りる階段のところから叫んでいた。

「早くこっちに来なさい。あなたがいたって足手まといなだけよ」

アロンは反論しようとしたが、急に涙が込み上げて来た。

「ラベル、無茶しないでよ」

アロンはくやし涙を必死にこら

えて言ったが、ラベルはそれに笑顔で答えた。

「お前より無茶なやつがどこに

いるってんだよ」

アロンは傾いた甲板を駆け上り、階段まで来てから後ろを振り返った。

「ラベル、無茶しないでよー」

ラベルはすでに戦闘の真っ直中

に入っており、アロンの声が聞こえたかどうかは定かではなかった。

「アロンへ、ここは彼等に任せておきましょう」

ソニアは優しくアロンの頭をなでたが、アロンはその手を払うと涙を見せないようにして階段を駆け降りた。

階段を降りたアロンの目に最初に飛び込んだのは、悲鳴をあげている子供達とそれを必死になだめる一人の母親の姿だった。

アロンの母親は彼を生んですぐに死んでしまった。アロンは一度も見たことのないはずの母親の姿が見えたような気がした。

(俺におぶくるがいたら、同じ

ように俺を守ってくれるのかな)

突然、船が大きく揺れた。

必死にしがみつく子供達を抱く母親の手が、かすかに震えているのをアロンは見た。

トンと、ソニアの手がアロンの肩にのった。

「アロン、船室に戻りましょ」

「ああ、わかってるよ」

自分の船室の前に来て、アロン

は深く溜め息をついた。

「あの母親、震えていた。それも

自分の子供の前でだ」

しばらく間をおいて、アロンの真意をはかってからソニアは答えた。

「それはそつでしようよ。こんな状況で……むしろ彼女は立派よ。子供のために少ない勇気を絞りだしているのだから。人間の勇気ってそついうものでしょ」

だがアロンは不満だった。

「俺は違う。違うわ」

「俺は違う。違うわ」

と、つぶやいて、船室の窓のそばに駆け寄り窓の外の様子をうかがった。

巨大なイカはなおも船を攻撃することを止めようとしなかった。

ぐるぐると船の周りを回った

り、時折離れてはまた近づいて船にとりついて水夫達と戦つ。

アロンの目に映ったクラークン

の姿は明らかに不審なものだった。

「ソニア、何だか変だと思わないか。あいつ、なんのためにこの船を襲ってるんだらう。別に人間

を食べようって訳じゃなさそつだけだ」

ソニアは驚いたようにアロンを

見つめた。

「なんのためって、私たちが怪物の心を理解できるものなのかし

ら」

「俺は羊たちの心がわかる。羊飼いをしていたからね」

アロンはじつとクラークンの様子を観察した。

「きつと、あの怪物にもこの船を襲つ訳があるはずなんだ」

「あなた、変わった子ね。怪物の気持ちを理解しようなんて……」

「変なのは他のみんなの方さ。俺は別に……あの動きをソニアはどつ思つて」

「きつと、あの怪物にもこの船を襲つ訳があるはずなんだ」

を壊そうとしていいるようだけ  
どっ」

「そっじゃないよ。あのイカ、俺  
たちをあつちの方に近づかせない  
ようにしてるんだ」

そつ言われて、ソニアは  
じっくりとクラーケンを見つめて  
みた。

「どっかじつでも、あなたには  
そつ見えるのね」  
ソニアは首をかしげながら言っ  
た。

「ああだから、あつちに船を進  
めちゃだめなんだ。ラベルに知ら  
せなきゃー」

アロンはそつ言つと部屋を出よ  
うとした。

だが、突然そのアロンの手をソ  
ニアがつかんで引き止めた。

「どつしてあなたはいつもそつ  
無茶なの。見守る方の身になって  
考えたことある？」

突然のソニアの行動にアロンは  
驚いた。

ソニアの目にはつつすらと涙が  
浮かんでいた。

会つて間もないソニアにそんな  
事を言われるすじめいはないと  
思ったが、アロンの口からその言  
葉は出てこなかった。

不意にソニアがそつと手を離し  
た。

「どっかめんなさい。あなたはあ  
なたなのよね」

大きく揺れた。  
アロンはとつさに舵に捕まつて  
堪えた。

「くっ。なんだ、今までのより揺  
れが大きかったようだが……」  
船長がそばにあった柱に頭をぶ  
つけて倒れ、しめくように言っ  
た。

海面に目を向けたラベルが叫ん  
だ。  
「一匹に増えましたー」

「なんだよー」  
甲板の上は騒然となった。  
今まで一匹にさえ苦しめられて  
いたのに、さらに一匹増えたこと  
は熟練した水夫達さえも驚愕さ  
せた。

しかも今度のは今までのヤツよ  
り大きい！

「くっ、なんてこつたー」  
船長がその大きな手を甲板に叩  
きつけた。

それを見たアロンは今になって  
初めて恐怖というものを感じた。  
アロンはしがみついていた舵を  
見つめると、それを大きく右に回  
した。

船が徐々に旋回を始めた。  
それを見た船長が立ち上がりつ  
て、物凄いきよつそつでアロンの  
ところを迫ってきた。

アロンは歯をくいしばつてキッ  
と船長を見上げた。  
「逃げなきゃみんなやられちゃ

ソニアはアロンから目を逸らし  
て黙つてしまった。

ソニアはつつむいたままそれ以  
上何もしゃべらなかつた。  
泣いているようにも見えたが、  
定かではなかつた。

仮にも泣いているとしても、  
アロンは何を言つていいのかわか  
らなかつた。  
ソニアがなぜそんな事を言いだ  
したのか全くわからなかつた。

「俺、ラベルのところに行かな  
きゃ」  
アロンは急いで部屋を出た。

それはラベルにクラーケンのこ  
とを伝えるというよりもむしろ、  
ソニアとの気まずい雰囲気から逃  
れたかつたからだつた。

アロンの頭は少々混乱してい  
て、長い間船が大きく揺れていた  
事もあつてか、ひどい頭痛がし  
た。

アロンは頭を大きく振つてそれ  
を吹き飛ばして、再び荒れ狂つ甲  
板に向かつた。

5

「アロンーなぜ上がったき  
たあー」  
甲板に顔を出したアロンにいき  
なりラベルの叫び声が飛んでき  
た。

「アロン。どつしたんだ。下にい  
う」  
船長はアロンの瞳の奥を見つめ  
るようにしてしばらく黙つていた  
が、不意に表情を和らげた。

「面舵一杯ー右旋回だー」  
船長の声は直ちに最下層にいる  
漕ぎ手達に伝えられ、船はより確  
かに旋回を始めた。

そして、船長はボンとアロンの  
頭に手をのせた。  
「もし、後退してもあの怪物が  
攻撃してくるようだつたら、責任  
は取つてもらうぞ」

「責任を取らつて……その時は  
もうみんな助かかんないんじゃない  
の」  
アロンが困つたように言つた。  
「違ひねえ」  
緊張した表情を崩して、船長は  
豪快に笑つてみせた。

ラベルがアロンのところにやつ  
て来て肩に手を回して顔を寄せて  
きた。  
「どっかやつたなアロン。この船  
長の考えを変えさせざる事なんてそ  
うできるもんじゃないんだぞ」  
声をひそめてはいるが、わざと  
聞こえさせるような言い方だつ  
た。

「聞こえてるぞラベル。それよ  
り、本当にあの怪物が襲つてこな  
いかちゃんど見張つてる」  
船長は不機嫌そつに言つたが、  
クラーケンは東へ逃げ出す船に対

だつた。  
だ、だめだ。

アロンがそつ思つた次の瞬間、  
水夫は海へと引きずり込まれて  
いった。  
ろつて言つただろー」

「ラベル。分かつたんだ！あの  
怪物がこの船を襲つ詠が」  
アロンは大声で叫んだが、甲板  
では悲鳴や怒号が飛び交つてお  
り、声はラベルのところまで届か  
なかつたようだつた。

ラベルが駆け寄つて来る。  
「アロン。お前は下にいるん  
だ！」  
「ラベル、違つんだ。なんであの  
怪物がこの船を襲つのか分かつた  
んだ」

「船を襲つ詠？」  
いぶかしげな表情でラベルはア  
ロンを見た。  
「そつだよ。あの怪物、この船を  
これ以上西に行かせないようにし  
てるんだ。どつしてかは分からな  
いけど確かにそつなんだ。ほらよ  
く見て」

ラベルはしばらくアロンを見つ  
めてから、クラーケンの方に目を  
やつた。  
クラーケンは今は船に近づつ  
とせず、船の西側で行つたり来た  
りしていた。

そつ言われてみると、ラベルに  
もアロンの言つたように見えてく  
してこれ以上攻撃を仕掛けてはこ  
なかつた。  
最初は船を見張るようには後方を  
うろついていたが、しばらくし  
て、クラーケンの姿は完全に見え  
なくなつた。

こつして、船は大陸までもう少  
しのところで反転し、一度逆戻り  
をすることになつた。  
船はクラーケンの海域を離れ、  
大きく迂回して再び進路を西に  
取つた。  
夜が明けはじめた。  
東の水平線から太陽が顔を出す  
の間もなくだろつ。

船はあちこち傷んでいたが、ラ  
ベルの話では沈没するようになつ  
てはいらしい。  
一見古くて弱そつに見えるが、  
数々の冒険をくり抜けてきたこ  
の船は見た目よりも強く、そして  
賢いのだといつ。  
アロンにはどつしてもボロ船に  
しか見えなかつたが、ラベルのい  
うことは正しいのだからといつ確  
信はあつた。  
「あなたが船を救つたんですつ  
て？」  
いつの間にかソニアが甲板に上  
がつてきていた。

「別にそんなつもりはないよ。  
ただ、助かるにはどつしたらいい  
か考えただけさ」  
「確かにそつ見えるな。……た  
しかあつちには小さな無人島が  
あつたはずだが。……よし、船長  
に相談していく」  
ラベルはそつ言つときびすを返  
して走り出した。  
「何してるーお前も来るんだ！」  
振り返りながらラベルが言つ  
た。  
アロンは大きく頷ぎ、ラベルの  
後について走りだした。  
「なんだとあ？西に船を向ける  
なつての？」  
返つて来たのは怒りを含んだ船  
長の声だつた。  
「そつです。これ以上攻撃を受  
ければこんなボロ船、沈没しかね  
ません」  
ラベルは怯まずに言つた。  
「だいたいどつしてあの怪物は  
俺達を西に進ませないようにして  
るんだ。その理由がないじゃない  
か。それに、敵を前にして俺たち  
船乗りが逃げるつての？」  
船長がラベルにすこむ。  
ラベルは一瞬言葉を失つたが、  
あらためて船長を見返す。  
「そつです。逃げるたです」  
船長とラベルはじつと睨みあつ  
た。  
船長が何か言おつとしたその瞬  
間、ドシンという音とでもに船が

アロンは照れたように頭をかい  
た。

「そつ……でも、どつして男の  
子つて、みんなそつ無茶なのかし  
ら……」  
誉めてくれるものだとばかり  
思つていたアロンはソニアの言葉  
に戸惑つてしまつた。  
どつ答えたらいいいのか困つてい  
たアロンを見て、ラベルが口をは  
さんできた。

「そりゃあ、女が勇敢な男つ  
てえのが好きだからだろ」  
「でも、そのために命を捨てて  
しまつような人を好きになつてし  
まつた女性がいたら、その人は  
きつと不幸よ」  
「それつて、アロンに告白して  
んの？」  
あつけらんとしたラベルの顔  
を見て、ソニアは表情を崩した。  
「あなた冗談ばかり……。でも  
ごめんなさいアロン。きつと私、  
変な事言つてしまつたわね。アロ  
ンがこの船を救つたことは確かな  
のだから、素直に感謝すべきだつ  
たわ」

にっこり笑つたソニアを見て、  
そのあまりの美しさにアロンは顔  
を赤らめた。  
その時ちよつと太陽が水平線の  
彼方からその姿を現わした。  
辺り一面が朱に染まる。  
アロンは自分の顔が赤くなつて

いるのを隠してくれた朝日に感謝した。

「それより、アロン。どうしてあの怪物が船を西に向かわせないようにしているってわかったんだ？」

ラベルが不思議そうにアロンに尋ねた。

「俺、羊飼いをしたんだけど、

狼がああいう動きをするんがあるんだ。そういう時って、狼の出産の時期で、ねぐらに近づこうとすると襲いかかってくるんだ。たとえ腹が減ってなくてもね。だから、あの怪物が人間を食べようと

していないのを見た時、そういうことが怪物の世界にもあるんじゃないかと思ったのさ」

「へえ、なるほどな。あの無人島の近海にあのイカの卵がなんかあったってことかな。怪物も我が子のために戦ってたって事かねえ」

ラベルは腕を組んでいかにも感心したように頷いた。

アロンがふとラベルの方を見る。

「俺もひとつ聞きたいことがあるんだけど、

意表を突かれたラベルは戸惑いながらも胸を張った。

「お、おう。俺にわかる事だったら何でも聞きな」

「ラベルは西の方で一番遠くまで行ったのはどっ？」

「そつだな……西のはずれのカーボナ。ここから船で一ヶ月くらいかかるところにある。なんだが陰気な灰色の海だったけど……それがどうした？」

ラベルが怪訝そうにアロンの顔をのぞきこんだが、アロンはそれに気がつかずつぶやいた。

「てことは、世界の終端はそれよりももっと遠くか？」

ソニアとラベルがアロンを見つめる。

「あなた、世界の終端を目指さないの？」

「べ、別にそんなわけじゃないよ。ただなんとなく気がなっただけだ」

アロンは慌てて否定した。

次の日甲板で、クラークンの犠牲となった船乗りたちの略式の葬儀が行われた。

葬儀の厳粛な雰囲気の中で、アロンはソニアが素直に誉めてくれた理由を考えさせられることになった。

船は予定の航路を大きくそれ、船足もかなり遅くなったが、三日後の夕方には大陸の港町ヴォワヤージュに着いた。

「お、おう。俺にわかる事だったら何でも聞きな」

「ラベルは西の方で一番遠くまで行ったのはどっ？」

Independent Works

# アンケートにご協力をお願いします

MediaGroove をお読みいただき誠にありがとうございます。

9月の創刊準備号から今号まで4回発行して、2000年を迎えようとしています。そこで、読者の皆様に今までの当誌の内容などに対し意見を伺いたく、アンケートを実施することになりました。このアンケートを、是非2000年からのMediaGrooveの誌面に生かし、よりいっそう充実したものにしていきたいと考えておりますので、ご協力をお願いします。

アンケートにご協力いただいた方の中から抽選で図書券などを差し上げたいと思っております。

アンケートは、PDFフォームを利用したインターネット及びFAXにより回収を行います。ご記入になる前に、必ず以下の回答手順をお読みください。

## FAXにて回答を行われる方

- 1、まず、ホームページにあるアンケートなどに記入する要領で、アンケートの各質問にお答え下さい。
- 2、ご記入内容を確認の上、お使いのAcrobatReaderより印刷を行ってください。アンケートはB4サイズですが、[用紙サイズに合わせる]設定でA4またはB5サイズに縮小されても結構です。
- 3、印刷されたものをFAXにて0298-60-2284(電話兼)へご送信下さい。電話番号はお間違えのないようお願いいたします。

## インターネットにて回答を行われる方

- 1、当誌をダウンロードされた方は、**普段お使いのWebブラウザにて表示する**ようにしてください(メニューなどの[開く]からPDFを選択) AcrobatReaderで表示した状態では、正しく送信されない場合があります。また、記入している間はインターネットにつなげる必要はありません。
- 2、次に、ホームページにあるアンケートなどに記入する要領で、アンケートの各質問にお答え下さい。
- 3、ご記入内容を確認の上、インターネットにつなげていただき、送信ボタンを押してください。

# 読者アンケート

記入する前に、注意事項を必ずお読みください。

1、MediaGrooveをいつから読まれましたか？

創刊準備号より 創刊号より 創刊2号より 今号より

2、MediaGrooveをどれくらいよまれましたか？

全ページ 半分程度 5～6ページ 1～2ページ

3、MediaGrooveの印象についてお聞きします。

3 - 1、IndependentWorksはどうですか？

面白い ふつう 面白くない

3 - 2、Inde-Xはどうですか？

面白い ふつう 面白くない

3 - 3、コラムはどうですか？

面白い ふつう 面白くない

3 - 4、「一片の制作者」など特集はどうですか？

面白い ふつう 面白くない

3 - 5、全体的にはどうですか？

面白い ふつう 面白くない

3 - 6、意見などがありましたらお願いします。

4、インディーズについてお聞きします。

4 - 1、インディーズをご存知でしたか？

知っている 名前だけは知っている 知らなかった

4 - 2、インディーズに関して興味がありますか？

ある ない

4 - 3、興味があれば、どんなことを紹介して欲しいまたは知りたいですか？

5、MediaGrooveの読み方についてお聞きします。

5 - 1、あなたは今までに掲載された作品を見ましたか？

はい いいえ

5 - 2、それはなぜですか？

内容がおもしろそう・つまらなそう

制作者に興味がある・ない

作品が読みやすい・にくい

その他

5 - 3、作品を見た場合、制作者に対して感想などを書きますか？

よく書く 内容が面白ければ書く 送りやすければ書く

あまり書かない

5 - 4、もし、ここで制作者に対し意見や感想があればお書き下さい。

5 - 5、MediaGrooveを1回でも印刷したことがありますか？

ある ない

5 - 6、MediaGrooveをファイルやメールで再配布したことがありますか？

ある ない

6、あなたのことについてお聞きします。

6 - 1、あなたの年齢層は？

6 - 2、どの程度インターネットをされていますか？

6 - 3、同人誌やバンドなどのインディーズ活動に興味がありますか？

ある 同業者です ない

7、最後に、意見などありましたらお書き下さい。

ご協力ありがとうございました。

# Media Grove

Editor in Chief : 相沢 裕貴

Writer & Editor : 本田 青羊

Contributer : 長月 昴平

Cooperation: fey  
通い妻  
モーニング息子

Other Stuff : You

Published By 

URL : <http://r7.1r.net/MG/>

E-mail : [mg@r7.1r.net](mailto:mg@r7.1r.net)

本誌掲載の写真・イラストおよび記事の一部または全部の無断転載・翻訳などを禁止いたします。また、一部のみの再配布を禁じます。再配布は原本と同じ状態でのみ許可いたします。

(C)R7 project.

**相沢裕貴** (Chief):今号から新  
たに取材を行って、紹介という  
形で記事を載せてみました。取  
材のご協力に感謝するととも  
に、せつと自分でいろいろな分  
野に触れてみる必要性を感じま  
した。そんな新たな気持ちで、  
来年から活動していこうと思っ  
ています。来年もよろしくお願  
いいたします。

**本田** (Editor): はじめまじ  
て、お世話になります。最近、物

## Voice of Staff

もうすぐ2000年。本誌も創刊から3ヶ月がたちました。たった3ヶ月でも、多くの方に、ご協力をいただきました。来年からは、「ミレニアムから21世紀へ」をテーマに活動をさらに展開していきたいと思っています。ご協力をお願いします。では、今号の制作にかかわったスタッフから一言（内は担当です）。

事を变な方へ变な方へと曲解する自分の癖に気がきました。デザイン作業にしても然り。これはもう不可抗力です。相沢さん、青羊さん、ブレイキを頼みます。  
**青羊** (Editor): よいおとしを。  
**長月昴平** (Cont.): 先月号の表紙はオーバースペイクの主人公アロン君でした。あの絵を見てどうやってマントの上からリュックを背負っているのか疑問に思った人……あなたはエライ。

「Media Grove」では編集スタッフやライター、投稿者を募集しております。最近DTPをはじめたばかりで腕には自身がないという方でも大歓迎。私たちも素人ですので一緒に勉強しながら腕を磨いていきたいと思っています。興味のある方は左記までご連絡↓

## 次号予告

インディーズ紹介コンテンツ第2弾

# 21世紀のグループ像 一片の制作者たち

Kook's HIGH HAT

## Independent Works

# iNde-x

次号からは、とりあえず隔月刊になります。 3・4月号配布は2月25日の予定です。